

平成30年 6月市長定例記者会見

日 時：平成30年5月30日（水） 午前11時～11時30分

場 所：射水市役所会議室302

報道出席者：北日本新聞、富山新聞、北陸中日新聞、朝日新聞、射水ケーブルネットワーク、庄東タイムス、ホットライン KOSUGI

当局出席者：市長、企画管理部長、財務管理部長、企画管理部次長、港湾・観光課長、未来創造課長（司会）

### 質疑応答の概要

- Q1 . いみず産サクラマスの仲買人からの評価は上々であった。陸上養殖のサクラマスの特産化するには、安定供給が欠かせないが、今後陸上養殖で生食が可能ないみずサクラマスの特産化に向けて、陸上養殖施設の拡大や整備など、市としてどのような方針で臨まれるのか伺いたい。
- A1 . いみず産サクラマスの初セリが行われ、評価も上々で喜んでいる。一方でブランド化の定着については、安定供給が必要である。課題としては、養殖施設のキャパシティの限界がある。その中で施設の拡張についても事業者の方と話をしている。他にもいくつか課題はあるが、1つは水の問題である。今は近畿大学から提供された海洋深層水を使っており、水の量に限りがある。桶などについては、水の課題をクリアできればさらに増やすことも可能になる。しかしながら、近畿大学と別に自力で整備するにはかなりの費用がかかる。課題を洗い出し、それらをどのようにしてクリアしていけるか検討している状況である。ブランド化の良い流れを作るため、品質のいいものをしっかりと市場に出したい。また、漁港での海上養殖による個体も加工用になると考えている。生食だけでなく海上養殖の加工も美味しいこともいみず産サクラマスのネームバリューを高めていく追い風になると考える。課題の改善に向けて今後もしっかりと取り組んでいきたい。
- Q2 . 市とJAいみず野で協力して整備を進めてきたもみがらの燃焼施設の活用予定、また、JAと協力して施策をしていく予定があるのか伺いたい。
- A2 . 国内初の施設として完成し、1つの節目を迎えることができたと思う。もみがらを燃焼して水溶性のシリカ成分を含んだ灰をどのように活用し

ていくのか、できれば販路の獲得をし、今まではお金をかけて処分していたもみがらを収入に変えていくことが大きな課題である。一番望ましいことは、肥料化を図って地元の農地から取れたお米のもみがらから生産したシリカ成分の肥料を地域の地域に返していく循環ができるということが理想である。工業製品や化粧品、食料品などの資源材料として注目されている。まずは、処分していたものが商品となること、また、それによってシリカや灰を原料とした生産工場などが地域の中に立地するようになること市全体の活性化にもつながる。今後は販路拡大に向けたネットワーク作りが一番大きな課題であると考えている。

Q 3 . 全国の米どころにおいても、もみがらの処理が課題となっているため、他の自治体からの問合せ等がたくさん来ると考える。射水で完成した施設、システムを各地に広げていきたいという考えはお持ちか伺いたい。

A 3 . ご要望、お話があればぜひ導入に向けて支援や協力をしていきたい。実際に、新潟市と連携協定を結んでおり、射水市での地消ブランドができたことで、新潟市からも具体的な話があるのではないかと考えている。

Q 4 . いみずムズムズ婚活パーティーについて。今回4回目ということで大変力を入れている印象を受けるが、これまでの3回を振り返ってこの婚活パーティーをどのように評価しているのか伺いたい。

A 4 . 若い方々、未婚の方から出会いの機会がなかなかないという話を聞く。実際、民間の結婚相談システムもある中で、行政としてどこまで踏み込むか、内部でもいろいろ検討してきた。ただ、民間というよりは行政が関わること、また、サポーターズクラブや地域の方々の力添えを頂いて事業を続けることで有形無形のサポートが期待できると考え、婚活事業をスタートした。サポーターズクラブの皆さんも大変熱心に活動していただいている。昨年3回の実績からいろいろなノウハウが蓄積されており、今回の年齢の設定についても、結婚への思いが強いと考えられる男性は35歳から女性は33歳からという年齢の設定を行った。今後もサポーターズクラブと連携しながら婚活事業についてしっかり取り組んでいければと考えている。